

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センターから

北方圏センターは国際協力機構（JICA）が設置している国際センター（札幌市・帯広市）に滞在する研修員の健康やリフレッシュのために、平日の研修終了後の夜や週末に福利厚生業務の一環として様々な行事を行っています。このコラムでは毎号、そうした行事やイベントを掲載していきます。

ミニバレーに汗！

3月10日（水）夜、帯広国際センターに隣接する「帯広市森の交流館・十勝」の体育館に、また、4月28日（水）夜には札幌国際センターとつながる札幌市の多目的ホール「リフレサッポロ」2階の体育館に、それぞれミニバレーボールのネットが張られ、夕食を終えて集まつた研修員がボランティアの人たちといっしょにミニバレーに汗を流した。

ミニバレーボール（※）は北海道十勝の大樹町が発祥の地で、今や全国にも愛好者が増えて各地で大会が行われている。ネットの高さが155cmと通常のバレーコートより低く、コートは少し狭い。ボールが柔らかいなど、体力に関係なく、大人も子どもも一緒にプレーできることでレクリエーションスポーツとして人気がある。

帯広センターでは毎月第2水曜日に、JICA研修員の他留学生や地元の日本人が集まっている。日々の研修に疲れた研修員たちもストレス発散をしながら楽しんでいる。今回はインドネシア、ベトナム、サモア、ウルグアイ、マラウイの研修員が参加した。

（※）昭和47年9月 大樹町教育委員会の「ママさんバレー教室」とビーチボールとの出会いがきっかけとなり、現協会理事長の小島秀俊氏が考案した。



札幌国際センター（リフレサッポロ）



帯広国際センター（森の交流館・十勝）

日本人は特別？

カロリンさんは、「日本人は、日本や日本人が特別だと信じていて、外国人にはわからないと思っています。でも日本にやってくる外国人は日本の事を調べてくるし、十分に知ったうえで来たいを思って来ています」と分析する。たしかに、我々はつい日本のこといろいろ教えたがり、その上、言つても解らないだろうからと当たり障りのない限りで話を止めたりもする。「日本の社会や人びとの有りようを観察するのは面白いです」彼女の見るところ、日本人は個々人の特異性を捨てて皆いつしょであろうとする。皆いつしょの社会に埋もれて安心しきっている。ある意味守られていると感じるようだ、と言う。



20頁のマンガ「Das Buch ihres Lebens(女性たちの本)」を自分で製本、展示発表した(2010.3月 卒業制作展会場で)

を受けて留学生として札幌にやってきた。立命館慶祥高等学校（川崎昭治校長・江別市西野幌 640-1）で楽しい毎日を過ごした。留学中に体験入学した（専）札幌マンガ・アニメ学院が気に入った。いったん帰国、ドイツの高校を卒業後、まっすぐ札幌に戻って入学した。

日本と日本人を観察して言う。「外国人が日本を知らないと皆さんには言うが、日本人は逆に世界のことを知らない。この国の中だけで生きて、その社会に守られている」。この双方の見方のすれ違いを無くす架け橋になりたいと思っている、得意なマンガの作品で。

世界へ
ペンとインクで
架け橋で
生き(描)
たけい橋で
きき(描)



カロリン・エックハルトさん
(ドイツ・ボツダム市出身)

さつぽろ
留学生回記

アーティストとデザイナーの根本的な違いは

2010年3月に札幌マンガ・アニメ学院を卒業した。将来も日本に住み続けて、マンガで活動を続けるのが希望だ。すでに集英社発行のマンガ誌「ヤング・ジャンプ」（週刊と月刊）が毎月募集する作品コンペで2度続けて受賞し、すでに誌上に登場している。

同学院の先生によれば、「アーティストは自分のために書き（描き）、世界に向かって“私を理解して！”と発信するが、マンガ家デザイナーは社会や読者の思いを理解し、消化したうえで、見る人、読む人が共感できるものを書く（描く）」のだと。カロリンさんの話を聞いて、何故マンガが日本で、世界で人気があるのかわかったような気がした。



学校法人/専門学校
札幌マンガ・アニメ学院
〒060-0042 札幌市中央区大通西9丁目
☎ 0120-722-867